

消費者教育実践事例集

第51回

地域の実情に即した取り組みで
子どもたちを不慮の事故から守る

佐藤 千津 Sato Chizu 特定非営利活動法人 ポポーのひろば

子どもの死亡原因の上位に「不慮の事故」があります。身近に潜む危険を事前にイメージできたら、こうした事故は防げるかもしれません。

当団体は、山形県村山市の委託により子育て支援センターを運営しています。2014年秋、県内の子育て支援者を対象とした子どもの事故防止のためのリスク・マネジメント講座を受講しました。講師は特定非営利活動法人保育の安全研究・教育センター代表理事の掛札逸美先生です。講座翌日、私たちは乳幼児の誤嚥^{えん}につながる小さな玩具を残らず施設内から除去しました。

しかし、家庭では？車内では？屋外では？子育て家庭対象の「不慮の事故」対策に取り組みたいと考えていたとき、タイミングよく2017年度の山形県消費者行政推進事業（先駆的プログラム）を紹介され、申請しました。

体験を通して学ぶ手法をヒントに

先駆的プログラムの補助を受けるに当たり、カナダの親教育プログラム Nobody's Perfect (NP) の手法をヒントにしました。親は最初から一人前の親ではなく、子どもとともに成長します。それを踏まえ、NPでは「体験」→「認識」→「関連づけ」→「応用」の流れを進める「体験学習サイクル」で親自身の気づきを促す学習活動を行います。体験を通して実践的に学べるため、子どもの事故防止においても注意喚起以上の効果が得られます。

今回の事業では、このサイクルを子どもの事故防止のための安全教育の学習活動に対応させながら、消費者によく知られているPDCA (Plan〈計画〉→Do〈行動〉→Check〈評価〉

→Action〈改善〉)に当てはめて全体の内容を組み立てました。事業名は「地域で回そう！子どもたちを不慮の事故から守るPDCA」です。

子どもの事故防止のためのPDCA

PとDでは、3歳（野外をテーマとしたものは小学生）までの子どもを持つ親と、子育て支援者を対象に子どもの事故防止の意識を高める講座を行いました（表）。野外の講座を除き、1歳以上の子どもは当団体の無料託児室を利用してもらい、1歳未満は親子同室としました。

募集はチラシや当団体のウェブサイトで広報したり、直接声をかけたりしました。その結果、受講者は、毎回20～30人程度になりました。

P 身の回りの危険を意識する

ここでのPは「意識づけ」。身近な危険に気づいてもらうことが、初回の講座の趣旨です。

掛札先生の紹介で、この分野を専門とする同センター副代表理事の所真里子先生にこの回の講師および事業全体の監修をお願いしました。

D 仮想と模擬の現場を検証する

Dは「現場検証」に相当し、時間をかけ丁

表 子どもの事故防止の意識を高める講座

回	テーマ	講師
1	子どもの安全(総合)	本事業監修者 (子ども安全研究者)
2	車内での安全対策	JAF山形支部
3	食物アレルギー (基礎知識)	小児アレルギーエデュ ケーター
4	アレルギー除去食のレシ ピ	
5	自然の中での事故防止	野外活動指導者
6	公園内での事故防止	
7	家庭内での事故防止1	助産師(大学講師)
8	家庭内での事故防止2	
9	乳幼児の心肺蘇生法	村山市消防署

寧に進めるため8回もの講座を実施しました。もちろん子どもたちを危険な目にあわせるわけにはいきませんから、仮想と模擬の現場です。

例えば、村山市は自家用車での移動が多いため、一般社団法人日本自動車連盟（JAF）に講師を依頼し、事故現場のスライドを見たりチャイルドシートの装着を実習したりしました（写真1）。また、食物アレルギーの講座や、里山に出かけての体験講座などは、要望や地域特質を考慮した独自性の高いものです。

そして、受講者にはPとD計9回の講座で気づいたことを何でも付箋せんに書いて、模造紙に貼ってもらいました。それに対し、講師からもコメントをもらって貼っていくことで（写真2）、この模造紙はこの後のCに活用できました。

C 受講者の「気づき」を抽出する

Cは「関連づけ」。ワークショップと、10回以上のスタッフ会議で構成されています。

大人と子どもの視野は違います。「安全だと思っていたのに、安全ではなかった」などの受講者の「気づき」を膨大な付箋から抽出し、平易な表現に書き直し、まとめる作業を行いました。

A 啓発グッズを制作する

Aは事業の最終目標の「啓発グッズ」の制作です。Cで得た「気づき」を生かし、実用的で事故防止を常時意識することができる啓発グッズとして、ハガキサイズ50枚1組の「きけんしるカード」（以下、カード）と、A3判2枚1組の掲示物「安全カレンダー＆ポイント集」（以下、掲示物）を制作しました（写真3）。制作に当たり、東北芸術工科大学（山形市）と連携を行いました。イラストは、「リアル過ぎず、正確に」「タッチはやわらかく、ポイントのみ強調」という私たちからの要望に応じて、大学から推薦された学生に描いてもらいました。

カードは、市販のポケット式ファイルに入れると絵本のように親子で見ることができます。子どもは学び、親は教えることで知識が定着し

写真1 車内での安全対策の講座の様子



写真2 受講者の気づきと講師のコメント

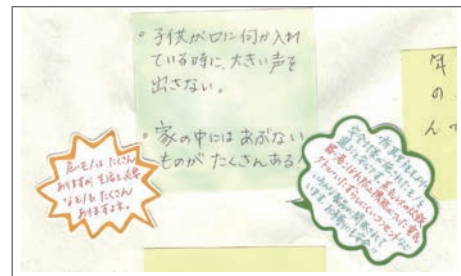


写真3 制作した啓発グッズ



ます。また、掲示物は子どもの成長発達による事故の変化を把握でき、119番通報のポイントなどもすぐ目につくので、役に立ちます。

子どもの事故なので、深刻な内容もあります。愛らしい絵であっても、講座で扱ったテーマに応じた色分けと色数を抑えた表現をすることで、現実にきちんと向き合える工夫もしました。

今後の展開



カードと掲示物*は各1,000部を制作し、市内の子育て家庭に届けることができました。これら啓発グッズの活用は各家庭に委ねましたが、ある講師から「安全教育の教材にしてはどうか」という提案がありました。今後、十分に活用される方法を検討していきたいと思います。

* 掲示物はダウンロードも可能。http://popoh.org/other/